

# 英語の読み能力向上に付随した授業内問題行動の変容

高橋裕子<sup>†1</sup>

大森幹真<sup>†2</sup>

早稲田大学人間科学研究科<sup>†1</sup>

早稲田大学人間科学学術院<sup>†2</sup>

## 1. 問題と目的

現在、通常学級に通う小・中学生の 8.8%に学習面・行動面の困難さがあるとされており、学校現場における授業中の児童の問題行動は年々増加傾向にある。先行研究から、児童の言語能力の低さが問題行動の生起に関連がある事が示されているが、英語を第二言語として学ぶ子ども英語能力と問題行動の関連については未解明である。さらには、音素・音韻の系統的指導による英語能力向上に伴い、行動変容につながるかについても解明されていない。そこで本研究では英語を学ぶ児童を対象に、日本語・英語の読み・音韻能力と、クラス内での離席等の問題行動の生起頻度の関連を検討した。その後、英語の読み書き支援による英語能力向上により問題行動の生起頻度が減少するかどうかを明らかにすることとした。

## 2. 方法

### 2.1 参加者

本研究では、通常学級に通っており、日本語を母国語とし、第二言語として英語を習っている 6~11 歳の児童 9 名を対象とした。また、その中で継続参加が可能であった 5 名に対して英語の読み書き支援を実施した。

### 2.2 刺激と装置

子どもの日本語の読み書き能力を計測するために読み書きスクリーニング改訂版 (STRAW-R) を使用し、英語の音韻能力を測定するために TOPA-2+ [1] を用いた。また英語授業中の問題行動を計測するためにビデオカメラを使用し、教員が子どもの問題行動を評価するために日本語版 SESBI-R を使用した。さらには英語の読み書き支援として、参加者が読み書きできない英単語を 40 個程度用意した。

### 2.3 手続き

- (1) 日本語・英語の読み書き評価として STRAW-R と TOPA-2+ を行った。それぞれ、提示された文字・単語を読むことや、音声刺激に対応した文字・絵を選ぶことを求めた。
- (2) 問題行動の評定として撮影動画をを用いて各参加者の問題行動の生起回数を求め、クラスの担当教員に各参加者に対して SESBI-R に回答してもらった。
- (3) 英語の読み書きのベースライン評価として 6 つの英単語とそれを構成する音韻を分解したもの、それらを再構成した新規単語を合計 36 個提示し、読むことを求めた。またこれらの音韻・単語の聞き取り書きを行うことを求めた。

- (4) 英語の読み書き支援として、標的 3 単語の音素を分解し、時間的・空間的な位置情報を保持したまま時系列的に提示する、継次刺激ペアリング (SSP<sup>[2]</sup>) 手続きを行った。例えば、SSP 手続きにおいて“jet”を学習させる際に、“j”を画面の左側に音声と同時に提示し、その後“et”を画面の右側に提示した後に単語全体と対応する絵刺激を提示した。参加者には画面を見て、提示された音声を模倣することを求めた。そして、提示後に学習した英単語の読み書きをすることを求めた。すべての標的単語の学習終了後に般化テストを行い、残り 3 つの標的単語の支援を同様に実施した。

- (5) (1), (2) と同様の評価を行った。

## 3. 結果

まず、TOPA-2+ 得点の高低に分けて SESBI-R の問題スコアを比較したところ低群の得点が有意に高いことが明らかになった [ $t(6) = 2.85, p < .05$ ]。また図 1 に英語読み書き支援前後での SESBI-R 得点の推移を示したところ、訓練前後で問題スコアに有意な減少が見られた [ $t(4) = 2.91, p < .05$ ]。

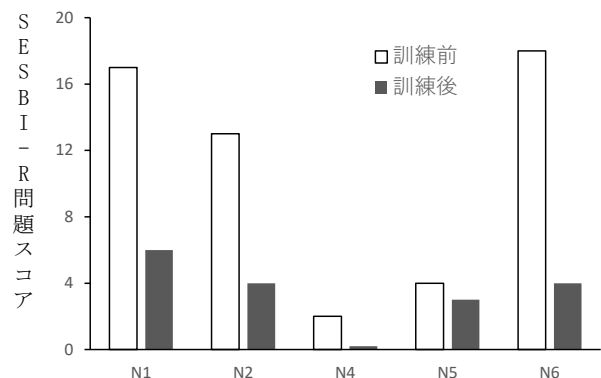


図 1. 訓練前後での SESBI-R 得点の推移

## 4. 考察

本研究の結果から、英語の授業中の問題行動の生起要因として、参加者の英語の読み能力や音韻理解の低さが関係していることが明らかになった。また英語読み訓練を行うことで、未訓練であった英単語書字獲得や、授業中の問題行動の質的・量的な減少につながることも判明した。

## 参考文献

- [1] Torgensen, J. K., & Bryant, B.R. (2004). Test of Phonological Awareness-Second Edition: PLUS. Pro-ed.
- [2] Omori, M., & Yamamoto, J. (2013). *Psychology*, 4, 238-245

<sup>†1</sup> YUKO TAKAHASHI, Graduate School of Human Sciences, Waseda University  
<sup>†2</sup> MIKIMASA OMORI, Faculty of Human Sciences, Waseda University